北西からの季節風と「東越谷河畔砂丘」　秦野　秀明

関東平野で「風」と云えば、何と言っても「上州の空っ風」が有名で、それは冬季に北西から吹き付ける「季節風」のことです。

その北西からの「季節風」によって、過去に形成された地形に「河畔砂丘」があります。関東地方では、かつての利根川の流路（流路跡を含む）沿いにしか存在しません(1)。

越谷市東越谷には、北から南に直線状に、長さ500m、幅70mに及ぶ「東越谷河畔砂丘」が存在します。東福寺に最高点があり、低地との比高は水準測量によれば6・09mで、最高点付近では4・25mの「風成砂」が確認されました。越谷市内には、かつての利根川の本流であった元荒川（流路跡を含む）沿いに、この「東越谷河畔砂丘」の他に、「袋山河畔砂丘」、「大林河畔砂丘」、「北越谷河畔砂丘」、「大相模河畔砂丘」の、併せて五つの「河畔砂丘」が存在します(2)。

「河畔砂丘」の形成に関しては、蛇行する流路の袂状部の風下側（東側または南側）に出来やすいことが明らかにされています(1)。

つまり、蛇行する流路が「西側または北側」に湾曲する場合、河道の「東側または南側」の袂状部に「ポイント・バー（蛇行州）」が発達するため、その砂粒が冬季に北西から吹き付ける「季節風」に吹き飛ばされ、背後の自然堤防の上に堆積することにより、「河畔砂丘」が形成されました(3)。

しかし、蛇行する流路が「東側または南側」に湾曲する場合、河道の「西側または北側」の袂状部に「ポイント・バー（蛇行州）」が発達するため、その砂粒が冬季に北西から吹き付ける「季節風」に吹き飛ばされても河道に落下してしまい、背後の自然堤防の上に堆積することはなく、「河畔砂丘」が形成されることはありませんでした(3)。

「河畔砂丘」の形成された年代は不明ですが、春日部市に存在する「浜川戸河畔砂丘」の「砂丘砂」の基底近くで、平安時代の終わり頃の土器が出土し、同「砂丘砂」の上で、「弘安六年（一二八三）六月」と記された板碑が出土していますので、多くの「河畔砂丘」は平安時代の終わり頃から形成が始まり、鎌倉時代の中頃には完成していたことになります(2)。

注

（1）多田　文男（1947）「利根川中流部の河畔砂丘」『地理学評論』21日本地理学会1～5

（2）平社　定夫・佐藤　和平（1993）『中川水系　Ⅰ総論・Ⅱ自然』埼玉県82～118

（3）高山　一（1994）『幸手市史　自然環境編Ⅰ』幸手市教育委員会57～61